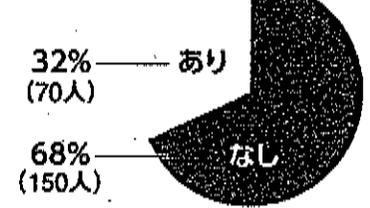


# 基礎疾患ない子も重症化

## コロナ第6波以降 入院の68%

新型コロナで入院した子どもの基礎疾患は？



3月10日～8月15日に入院した子ども。日本集中治療医学会のデータから

新型コロナウイルスに感染した子どもにも基礎疾患がなくても、重症化するケースが報告されている。オミクロン株の影響で感染する子どもがこれまでにない規模で増えたことで、一定の割合で重症化する子どもも増えた形だ。今後の「第8波」も視野に、専門家はワクチン接種の重要性を指摘する。

### 専門家 ワクチン重要性指摘

厚生労働省の資料によると、9月20日時点で「10歳未満」と「10代」の感染者は計549万人。同省の資料をもとに分析すると、2020年（9～12月）は1万4千人、21年は22万人で、感染の大半がオミクロン株の流行以降だ。死者も21年末までで3人だったのが、22年9月20日現在までで31人と増えている。

感染者の増加にともない、重症や中等症になって入院する子どもの報告も出ている。気になるのは入院が必要な子どもの中に、基礎疾患がないケースも一定程度報告されていることだ。日本集中治療医学会によると、第6波以降となる今年3月10日～8月15日に酸素投与が必要な中等症や重症になって入院するなどした全国の20歳未満の感染者220人のうち、68%にあたる150人は基礎疾患がなかった。

6月下旬以降に入院した

152人を対象にした調査では、半数は未就学児で、小学生が3割、1歳までの乳幼児が1割と、低年齢の子どもにも多い傾向にある。意識障害をおこす急性脳症や、高熱を出すことでおこる熱性けいれんの症状が増える傾向にあったという。

調査を取りまとめた兵庫県立こども病院の黒澤寛史医師は、オミクロン株の流行以降、子どもの感染者が増えたことで基礎疾患の有無にかかわらず、一定の割合で重症や中等症になる子どもが増えたと指摘。「どんな子どもでも重症や中等症になり得るので、密な場所でのマスク着用など社会全体が適切な感染対策を意識してほしい」と話す。

日本小児科学会で子ども感染を分析する聖マリアーナ医科大学の勝田友博准教授（小児感染症）によると、オミクロン株の流行後、特徴的なせきが出る

「クルーズ症候群」による呼吸器症状の悪化やけいれん、嘔吐による脱水で入院する子どもが増えているという。

勝田さんは、外出自粛などの行動制限がなくなっている中、「ワクチン接種の重要性は高まっている」と話す。日本小児科学会によると、接種が始まっている5～11歳を対象としたワクチンは副反応が12歳以上よりも少ないことや、重症になるのを防ぐ効果が40～80%程度あるというデータが出てきている。

オミクロン株の「BA.5」に対応した5～11歳用のワクチンは米国で承認申請が9月末にあった。日本でも今後申請されるとみられる。厚生省はいまのワクチンでもオミクロン株に対する一定の感染予防効果が期待される、としている。

4歳以下のワクチンについては、5日に厚生省の専門部会で審議される。

勝田さんは、ワクチンが使えるようになってから時間がそれほど経っていないことから、悩む保護者の気持ちも理解できるとしたうえで、「接種に悩んだらかかりつけの小児科医に相談してほしい」と話す。

(米田悠一郎)